

間宮林蔵の大陸の旅から 200 年にちなんで ——国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界」——

中村 和之

2009（平成 21）年は、間宮林蔵がアムール川下流域を踏査し、デレンの満洲仮府で 3 人の清朝の官吏と名刺を交換してから 200 年目にあたる。旅行の後、間宮林蔵は村上貞助の援助を得て報告書を作成した。それが『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』の 2 冊で、サハリン島やアムール川の下流域に居住する先住民族の文化を研究する上で貴重な文献となっている。「間宮林蔵の大陸の旅 200 年」実行委員会は、函館市と稚内市で国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界」を開催した。では、両シンポジウムの基調講演・報告の内容を順に紹介する⁽¹⁾。

1. 国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界——デレン・サントン人・石碑」

日 時 2009 年 8 月 30 日（日）

会 場 函館市中央図書館 視聴覚ホール

主 催 「間宮林蔵の大陸の旅 200 年」実行委員会

共 催 函館市中央図書館

後 援 函館工業高等専門学校・北海道民族学会・函館市教育委員会

基調講演 松浦 茂（京都大学）「19 世紀初頭江戸幕府の北方調査」

報 告 大塚和義（大阪学院大学）「間宮林蔵『東韃地方紀行』の道をたどる」

タチヤーナ＝ローン（サハリン州郷土誌博物館）

「サハリン——間宮林蔵の探検から 200 年——」

中村 和之（函館工業高等専門学校）「1809 年 9 月 5 日に間宮林蔵は何を見たか？」

総合討論 司会：小川 正樹（函館ラ・サール高等学校）

通 訳 垣内 あと

(1) 本シンポジウムの記録は、下記にも発表されているが、本稿の内容とは異なる部分がある。

1. 中村和之「国際シンポジウム『間宮林蔵が見た世界』」『函館日ロ交流史研究会会報』第 31 号, 2010 年, 2-5 頁。

2. 中村和之「国際シンポジウム『間宮林蔵が見た世界』」『北海道民族学』第 6 号, 2010 年, 110-114 頁。

1) 松浦 茂「19世紀初頭江戸幕府の北方調査」

間宮林蔵の『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』、松田伝十郎の『北夷談』は、中国の史料にはない記述があり、貴重な記録である。これまでの研究は、松田・間宮の調査を地理学と民族学の視点から高く評価してきたが、彼らの調査を政治的な観点から考察することはほとんどなかった。

清はアムール川下流地方と樺太に辺民という組織を置き、ハライダ・ガジャンイダ・デオテジュセ・バイニヤルマの4つの階層に編成した。1689年、ネルチンスク条約によってアムール川流域は清の領土となった。翌1690年、清はアムール川流域に国境調査隊を派遣したが、その時調査隊の一部が樺太北部に渡り住民53戸を辺民に組織した。これが清の史料に樺太が出てくる最初である。それ以降、清は毎年のように樺太へ兵を送ったが、その活動範囲は北部の平原地帯に限られていた。その後清は、1727年のロシアとの国境交渉をきっかけに樺太の中部と南部に進出し、住民を辺民に編成した。これらの辺民のなかには樺太北部のニヅフ、南部の西海岸のナヨロ、東海岸のタライカ・コタンケシなどに居住するアイヌも含まれている。このように清は樺太南部にまで進出したが、清の進出はここで止まってしまい、清の勢力が樺太全土に及ぶことはなかった。

清は、アムール川下流域・樺太を特別な地域として一般人の立ち入りを禁止する一方、この地域の2398戸を辺民に組織した。辺民は1戸ごとに黒テンの毛皮を毎年1枚ずつ献上する見返りに、絹・木綿・針・櫛などが与えられた。はじめは清の支配は安定しているように思われた。ところが、1742年のキジ事件という殺人事件をきっかけに、樺太東海岸のアイヌは清から離反してしまった。また清も、アイヌの離反を食い止めることはしなかった。そのため日本の進出が本格化する18世紀末には、清は樺太から撤退しており、日本人が清の勢力と直接に接触することはなかった。ただ樺太住民のなかには清が置いた辺民組織が残されており、辺民の地位を世襲する人たちがいた。

18世紀までの日本人による樺太の調査には、共通する特徴がある。まず、誰一人として樺太の北部に達した者がいないということである。それらの調査隊は、清の支配する地域に部分的に足を踏み入れただけで、樺太南部に住むアイヌと交易に訪れる山丹商人については記しているものの、樺太北部に誰が住むのかという記述はない。もうひとつは、彼らが誰一人、清がアイヌを辺民に組織していたことに気づかなかったことである。

1808年の調査の結果、松田・間宮は樺太が離島であることを確信した。また、樺太の大部分が外部勢力の支配下にあり、ハライダ・ガジャンイダなどの辺民の職を貰っていることを発見した。しかし、この段階では外部勢力が何者であるのかは明らかではなかった。この外部勢力が清であることを明らかにしたのは、1809年の間宮林蔵の調査である。間宮は、デレンの満洲仮府でトジンガ・ボルフンガ・フェルヘンゲという3人の清の官吏と会った。間宮は、トジンガから貰った名刺の文字から、彼らが清の官吏であることを知った。また間宮は、デレンで行われているのは貢納を行う政治的な儀式であり、単なる経済的行為ではないことに気づくとともに、辺

民組織が、清がアムール川下流域・樺太に統一的に設けた行政組織であることを理解した。樺太を含むアムール川下流域の政治情勢を正確に理解できた日本人は、間宮林蔵が最初であった。

一方松田は、樺太南部のアイヌの借財の整理に取り組んだ。山丹商人は、前借り・前貸しという独特の取引方法で樺太の現地住民を支配するようになり、各地で紛争を起こした。松田は



写真1 松浦茂氏の基調講演（函館市）

1809年にクシュンコタンに到着すると、アイヌが自力で返済できる負債は返済させ、残りは幕府が肩代わりすることとした。さらに、アイヌが山丹商人と財貨を貸借することを禁止し、山丹商人から購入した品物を献上することも禁止した。この松田の行動は、幕府の方針である樺太の内国化とアイヌ撫育策を実現するものであったが、その際、幕府が救済しようとしたのは、それまで松前藩に従っていた樺太南端部のアイヌであった。

1809年、幕府は樺太の名を北蝦夷地に改め、これにより樺太南端部の内国化が完成した。松田・間宮の調査によって、江戸幕府は清がその直前まで樺太の大部分を支配していたことを知った。この報告がもとになって、江戸幕府は樺太に対する具体的な方針を打ち出した。このことこそが、松田・間宮の調査が日本近世史のなかで占める重大な意味である。

2) 大塚和義「間宮林蔵『東韃地方紀行』の道をたどる」

私はアムール川下流域・樺太の現地調査を行い、林蔵の歩いた道はキジ湖から間宮海峡に出るルートを除いてほぼ踏査した。各地でいろいろな遺物を確認したが、これらのなかには、松浦茂氏が満洲語の文献史料をもとに明らかにした事実と符合する品物がある。アムール川下流域のブラワというウリチの村で発見したクジャクの羽飾りとその容器は、清からホジホンの地位を与えられた者に下賜されたものである。さらに、ウリチの家にあった袋には中国製の錦が入っていたし、錦の糸を引き抜いて刺繍糸とした衣服も確認した。またブラワでは、クイの帯といわれる樺太アイヌのものと思われる帯や、日本製の漆器を見つけた。漆器の裏面には、シロシというアイヌの刻印があった。これらはアイヌが交易で持ち込んだ品物である。スモリャークがブラワで採集したアイヌの三兄弟の伝承では、三兄弟のうち一人が北海道に留まり、もう一人は樺太に移り、三人目がブラワに移り住んだことになっている。このような伝承の存在も、アイヌがこの地域で活動していたことの証拠である。

つぎに、間宮林蔵の自筆と推定される文書4件を紹介する。この資料については『北海道新

聞』紙上にも紹介しているが⁽²⁾、『間宮林蔵図』と村上貞助の文字で書かれている。イナウ（木幣）やニヅフの銚先の形も正確に描かれており、林蔵の自筆である可能性が高い。

3) タチヤーナ＝ローン「サハリン——間宮林蔵の探検から 200 年——」

間宮林蔵の『北蝦夷図説』⁽³⁾は、1990 年にヴァレリー＝ペレスラフツェフによってロシア語に翻訳された。この翻訳は英訳からの重訳であり、さらに挿絵を欠いていた。そのため私は、1993 年に札幌を訪れた際に、挿絵付きの『北蝦夷図説』を入手して、ようやく本文の記述を理解できるようになったが、『北蝦夷図説』にはいまだに解明できない部分が残っている。

今から 200 年前に、間宮林蔵が大陸とサハリンの先住民の生活と習慣の特徴を詳細に記述したことは、学術的に高い価値がある。間宮林蔵が記録したサハリンアイヌ・ウイルタ・ニヅフ・ウ

(2) 大塚和義「間宮林蔵の野帖 新資料」『北海道新聞』2009 年 8 月 26 日（夕刊），7 頁。

間宮林蔵は文化 5 年（1808 年）、松前奉行の役人松田伝十郎とともに樺太島奥地ならびに山丹（現アムール川下流域）検分の命を受けて島に渡り、樺太が離島であることを確認した。さらに林蔵は松前奉行より奥地再調査を命じられ、翌文化 6 年、中国・清朝の辺民支配の拠点「満洲仮府」が置かれたデレンの検分を決意して山丹船に同乗し、7 月 11 日にデレン到着。朝貢や交易の様子を観察し清朝役人とも歓談後に帰着した。樺太や山丹地方の住民の詳細な風俗や地理情報を文化 8 年、幕府に報告した。

「東韃地方紀行」「北夷分界余話」および「黒竜江中之洲 並 天度」などの地図類がそれであるが、すべて林蔵の自筆でなく、浄書は村上貞助の手による事実を、筆者は国立公文書館内閣文庫において確認した。前二者の著作は、間宮林蔵口述、村上貞助記述となっている。林蔵がこの時期、執筆できない状態ではなく、口述という形式をとったことに、いかなる事情が隠されていたのだろうか。筆者は、大陸に渡り、異国人である清朝役人と会ったことが国禁を犯す行為とみなされたと考える。

林蔵の樺太および山丹地域の探検・調査は、彼の強い関心と決死の覚悟で敢行され、彼の見聞した知識は、当時唯一といってよい情報を幕府にもたらした。「東韃地方紀行」の、出会った他民族の風俗や生死に関わる生々しい体験、河の流れや樹木や山並みの景観描写など、全体がリアルな紀行文となっており、現地取材記録・野帖の存在なくしては不可能な表現が多い。しかし野帖の現物はすでに失われてしまったとみられてきた。

筆者がこのたび見つけた村上貞助の草稿は、林蔵の自筆と思われる野帖資料を切り貼りしたとみられる断簡 4 枚などである。資料には、N・ウィツェン「北・東タターリア誌」（1785 年蘭語版）を馬場佐十郎が翻訳した「東北韃靼諸国図誌 野作雑記訳説」（文化 6 年）の蝦夷地の部分を村上貞助が写したものが含まれ、文化 8 年の報告作成の際に使われなかった野帖の記録を切り抜いた断片とみられるものが貼り合わせられていることに注目したい。

この林蔵の野帖と推定される資料が、確実に林蔵自筆であるという確証はない。しかし、確かな林蔵の自筆書簡類や周辺の調査資料と比較してみると、第一に書体が極めて近似している。さらに断簡に図示されている銚先を例にとっても、北樺太からアムール川下流に住むニヅフ（林蔵の記述はスメルンクル）が現在もアザラシ猟に用いる鉄製の銚先である。同時に林蔵は「ギデ」とアイヌの銚先キテに近似するものを記録している。ギデは満州語の槍先ギダに由来するものと北方言語学者の教示を受けており、現地を踏んだ者しか描くことのできない記録であると筆者はみている。

林蔵の功績に対し、当時、幕府が正当な価値評価を与える環境ではなかった。伊勢の船頭大黒屋光太夫は漂流後、寛政 4 年（1792 年）にロシア船で帰国できたが、帰郷はおろか体験談を書き記すことも許されず、江戸に留め置かれた。林蔵も大陸行の自著は差し控えさせられ、悲運な立場に置かれてしまったのであろう。

(3)『北蝦夷図説』は『北夷分界余話』の刊本の名称である。ここではローン氏の表現に従った。

リチなどの生活文化についての記述と絵は、20世紀に記録された写真や各博物館の収蔵資料と照らし合わせることができる。また絵に残されたいくつかの儀礼や習慣には、つい先ごろまで行われていたものがある。その一方で、間宮林蔵の絵にしか残っていないものもある。私たちの博物館では、ニヴフの夏の家と冬の家を、間宮林蔵の絵から復元した。この先、彼らの



写真2 タチヤーナ＝ローン氏の報告（函館市）

社会意識と生活様式はさらに変化を強いられるであろう。しかし、200年前に間宮林蔵が書き残した彼らの伝統文化の一部は、今でもしっかりと現地の諸民族の文化に息づいている。

4) 中村和之「1809年9月5日に間宮林蔵は何を見たか？」

間宮林蔵はデレンからの帰路、文化6年7月26日（西暦1809年9月5日）に、現在のティル村を通過した。林蔵は、同行していたニヴフが米・麦・粟などの穀物を水中に投じて、石碑を遙拝していることを記している。漁撈を主な生業にするニヴフにとって、穀物は交易で手に入れる貴重品であり、19世紀のシュレンクや20世紀のクレイノヴィチなどのロシアの民族学者の文献にも、ニヴフの儀礼に穀物を用いる例は紹介されていない。

ではニヴフの人たちは、穀物を水中に投じる儀礼をどのようにして獲得したのか。ティル村は、13世紀には東征元帥府が、15世紀にはヌルガン都司が置かれ、さらにヌルガン永寧寺という寺も併設されていた。また松浦茂氏の研究によれば、清の雍正年間には、ティル村はディヤン＝ホンコと呼ばれて、清の役人が出張して毛皮の貢納を受けつける場所であった。おそらく、ディヤン＝ホンコに駐在した清朝の役人が穀物を用いた何らかの儀礼を行い、朝貢に来たニヴフの人たちは、その儀礼を受け入れたのではあるまいか。シュレンクの記述に穀物を用いた儀礼が出現しないことは、清の辺民支配の衰退とともに、この儀礼も衰退したことを示すのであろう。このように、清朝の辺民支配が先住民社会に及ぼした影響は、経済的・文化的な側面に留まらず、精神的な側面にも及ぶものであった可能性がある。

2. 国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界——サハリン島・デレン・石碑」

日 時 2009年9月5日（土）

会 場 稚内総合文化センター 小ホール

主 催 稚内市・「間宮林蔵の大陸の旅200年」実行委員会（共催）

後援 北海道民族学会・函館工業高等専門学校

基調講演 佐々木利和（国立民族学博物館）「間宮林蔵のみたカラフト」

報告 佐々木史郎（国立民族学博物館）

「デレンを探して——間宮林蔵はどこまで行ったのか？——」

タチヤーナ＝ローン「サハリン——間宮林蔵の探検から 200 年——」

中村 和之 「1809 年 9 月 5 日に間宮林蔵は何を見たか？」

総合討論 司会：内山 真澄（稚内市観光交流課）・千田 周二（北海道稚内高等学校）

通訳 中川 善博（稚内市建設産業部）

1) 佐々木利和「間宮林蔵のみたカラフト」

間宮林蔵は、村上貞助と一緒に『北夷分界余話』・『東韃地方紀行』を編纂した。これは、幕府に献上した言わば正式報告書である。この一連の旅で、林蔵は何をどう見てきたのだろうか。間宮林蔵は、文化 5（1808）年に白主から東海岸を踏査した。西海岸を北上した松田伝十郎とはノテトで落ち合い、翌年には単身で東韃地方に渡った。『北夷分界余話』・『東韃地方紀行』の絵は、村上貞助が描いたものである。幕府に献上した「北蝦夷地図」を見ても、林蔵が細かいメモを取ったことが想定される。貞助はアイヌ以外の人びとを見ていないから、ニヴフの魚皮衣や帯、船などの細かな描き方は、林蔵のメモなしには描けなかったといえる。『北夷分界余話』の初稿本の絵を調べると、幕府に上呈した本とは絵の違うものがある。上呈する時に絵を変えた理由は不明である。また、林蔵の記録にしか残されていない習俗もある。『北夷分界余話』の「女夷洗屍」は、アイヌの長の死体を毎日洗う、アイヌの葬礼を描いた唯一の例である。

間宮林蔵は、調査のなかでアイヌ・ニヴフ・ウイльта・山丹の人びとを描いているが、彼の本来の目的は何だったのか。それは、やはり地図を作るためではなかったかと考えられる。林蔵の樺太地図にはひとつの特徴がある。それは、緯度の測定が正確にできていないということである。文化 6（1809）年に樺太から帰ってきた時点の地図には、緯度に 2 度ほどの狂いがある。方位については、樺太に行く前に伊能忠敬から特製のわんか橈化羅針を貰ったために正確に測定できたが、緯度には問題があった。

林蔵は、伊能忠敬と同じく歩測で長さを出しているが、方角が正しく出ないと正しい地図ができない。そのため、林蔵の測量では山の存在が重要になる。これは伊能忠敬も同じである。伊能忠敬の地図作りは、針突法しんとつほうという方法を用いている。この方法で作られた地図を観察すると、紙に針で穴を空けている。これが測点である。測点と測点の間は、直線で結ばれている。間宮林蔵は、伊能忠敬に私淑した人物だが、不思議なことに林蔵の自筆の地図といわれる地図は、伊能忠敬の針突法が用いられていない。一方、幕府に献上した地図は針突法が用いられている。その理由は不明である。現在ライデン大学に所蔵される樺太地図は、最上徳内がシーボルトに与えたものである。この地図は林蔵が最初に書きあげた樺太地図の可能性があるが、針突法で描かれたものであるかどうかは未確認である。

伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」の蝦夷地の北方と内陸部は、間宮林蔵が測量したものである。これは伊能忠敬が林蔵の測量を高く評価していた証拠である。だがこの地図には、国後までは載っているが、樺太が載っていない。これはなぜだろうか。「大日本沿海輿地全図」は、伊能忠敬の生前には完成せず、文化15(1818)年の伊能忠敬の死後も編集が進められた。伊



写真3 佐々木利和氏の基調講演(稚内市)

能忠敬の死後、文政4(1821)年の「大日本沿海輿地全図」の完成まで、地図の作成を指導していたのは、高橋景保であった。あるいは、高橋景保が自身による世界地図の作成との関係で、「大日本沿海輿地全図」に樺太を載せなかったのかもしれない。シーボルト事件のきっかけは間宮林蔵であったとされるが、林蔵は幕吏としては優秀で、また優れた測量士でもあった。現在、伊能家に残されている蝦夷地の地図の下図を精査すると、林蔵の測量の方法と技術を明らかにできるかもしれない。さらに、林蔵の野帳^{のちよう}を復元できる可能性もある。

間宮林蔵の弟子に、今井八九郎という松前藩士がいる。八九郎は、利尻島・礼文島などの地図を残しており、安政年間に樺太を測量した時には、間宮林蔵の養子である間宮孝順と行動を共にしている。林蔵や八九郎は、伊能忠敬の測量隊とは違い、すべて一人で測量をしなければならなかった。その際アイヌの人たちの助けがなければ、彼らの測量はできなかったであろう。

2) 佐々木史郎「デレンを探して——間宮林蔵はどこまで行ったのか?——」

デレンがいつから清朝の出張所として使われ始めたのかについて、はっきりした年代はわからない。松浦茂氏の研究によれば、清朝の出張所はディヤン=ホンコに置かれており、ここは現在のティル村である。その後、上流のキジに移ったが、ここはサハリンからの交易ルートとアムール川を通る交易ルートの結節点に位置していた。1801年には、中村小市郎・高橋次太夫がサハリン西海岸のナヨロのヤエンクルアイヌと会って、清朝が1798年にキジの出張所を廃止したため、1799年にはデレンより上流のウジャラまで行かなければならなかったことを聞きだしている。おそらく、デレンは1800年代の初めに使われ始めたのではないかと思われる。

私は、1997年、98年、2001年の現地調査で、ノボイリーノフカ村の対岸にあるデレンという島が、間宮林蔵が訪れたデレンであることを確かめた。その理由としては、間宮林蔵の作った地図と一致すること、シュレンクやマークがここにデレンというウリチの村があって、間宮林蔵のデレンであろうと言っていることなどがある。デレン島では、中国製の磁器の破片などが落ちて

いる場所も探したが、満洲仮府が置かれた正確な位置はまだわかっていない。また現地調査の際、この地区に住むナーナイやウリチの人たちにデレンについての聞き取りを行ったが、デレンについての言い伝えは全く残っていなかった。ただしナイヒンでは、ウジャラに中国商人がやってきて、大きな市が立っていたという話を聞き取ることができた。

3) 4) タチャーナ＝ローン氏と中村の報告は、函館シンポジウムと同じ内容である。

二度のシンポジウムを通じて、これまで日本北方史の観点から検討されてきた間宮林蔵の行動を、19世紀初頭の北東アジアの歴史のなかに位置づけることができた。また、間宮林蔵の記録や挿絵の価値について、さまざまな視点から評価・検討することができた。

間宮林蔵の名前は日本では有名であり、研究もそれなりに蓄積されているが、海外ではそうではない。ローン氏が指摘したように、ロシアでは『北蝦夷図説』を参照しているようだが、幕府への献上本である『北夷分界余話』によるべきであることは言うまでもない。ことばの問題もあって、海外の研究者には間宮林蔵の著作が利用しづらい状況にある。このことなどは、日本の研究者の努力によって解決することが可能である。その意味では、今後の課題も明らかになったシンポジウムであった。

(NAKAMURA Kazuyuki, 函館工業高等専門学校)